

特集3

南都留地域教育フォーラムと美術教室

特集2

9年目を迎えた
地域交流研究センターの
講義科目「地域交流研究」

特集1

動き始めた
「都留市まちづくり交流センター」



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

14.3.4
Yanaka

題字 黒部行子
絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

巻頭文・・大学の地域参加と住民の学習

山本健慈 4

特集1 動き始めた「都留市まちづくり交流センター」

■「都留市まちづくり交流センター」の施設と趣旨

「都留市まちづくり交流センター」の設立経緯と趣旨 相川泰 6

■「都留市まちづくり交流センター」の担い手からのメッセージ

「都留市まちづくり市民活動支援センター」からの報告と提案 池谷迪久 7

学びのシニアと地域の活性化 ～公民館が目指す学びの場～ 杉田規子 8

まちづくり市民交流と都留市立図書館の取り組み～交流の先にめざすもの～ 青池恵津子 9

学生との出会いをとおして ～ファミリー・サポート・センター～ 杉田さえ子 10

都留文科大学地域交流研究センターとまちづくり交流の新たな取り組み 杉本光司 11

■「都留市まちづくり交流センター」での交流の実践

地域福祉とまちづくり交流 ―「暮らしに役立つみんなの広場」の可能性― 森嶋美子 12

百人一首のイベントを通して 中里真琴 13

囲碁・将棋の輪を広げるために 吉田耕平 14

■2月14日の降雪災害

大雪の日、1週間で起きたこと ―「都留市まちづくり交流センター」の1週間― 本田祐士 15

特集2 9年目を迎えた地域交流研究センターの講義科目「地域交流研究」

教養科目「地域交流研究Ⅱ」―生きもの地図をつくる― 西教生・前澤志依 16

教養科目「地域交流研究Ⅳ」―地域の交流誌をつくる― 北垣憲仁・若尾奈津美・宮下ひかる 17

教養科目「地域交流研究Ⅲ」―「山梨」を知り、歩き、知らせる― 杉本光司・源春風・柘植大在門・李在夏・桐生実佳 18

特集3 南都留地域教育フォーラムと美術教室

■ 南都留地域教育フォーラム

南都留地域教育フォーラムを開催して……………小林統也……………20
 南都留地域教育フォーラム第2分科会（ネットワーク作りと活用）に参加して……………鳥原正敏・佐藤優海・早坂駿吾・舘山拓人……………21

■ 陶芸講座

谷村第二小学校体験学習会における「陶芸講座」を振り返って……………舘山拓人……………23

シリーズ 地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―（その6）

映画『100,000年後の安全』を鑑賞して考えさせられたこと……………牛田弘長……………24

■ 自治体と大学

富士河口湖町議会との「議会基本条例」づくりに参加して……………進藤兵……………25
 ―公立大学の地域貢献、そして憲法92条と憲法23条の出会い―……………

■ 市民公開講座

イギリスの文化、歴史を学んで……………佐野兼央……………26

イギリスの文化・比較文化の見地から……………小野武彦……………27

■ ミュージアム都留との連携事業

つる子どもまつり―はじまり・いま・みらい―展を振り返って……………花山泰裕……………28

企画展「写真が伝える都留の思い出―未来へ贈る地域の記憶―」の準備から考えること……………森屋雅幸……………29

■ キャンパスにリスを呼ぶ会…写真と資料

クルミの木をキャンパスに植樹する計画（趣意書）〈資料〉……………

……………都留文科大学地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門……………30

リスを目撃しました……………松土清……………31

大学の地域参加と住民の学習

山本健慈

東京一極集中、地方の疲弊、少子高齢化等の日本社会の大きな変化のなかで、日本の大学は、大転換を迫られています。この事態にどのように対応するべきであるか、できるのか、その方向性を示すことのできる知恵は、大学にあるのではないかと、社会からの大学への期待は広がっています。大学も、社会からの支持、承認を得なければ、今後さらに進むであろう少子化のなかでは存在すら危うくなるという危機意識もあり、これまでの教育、研究という機能に加えて「社会貢献」という新たな機能の具体化に着手しています。

すなわち、〈社会（地域・住民）と〈大学〉が、直接的に相対し、繋がるという課題（これを「地・学共同」と言います）が、日本の大学史上初めて現実のものとなったのです。その点では、都留市という自治体を基盤に存立されてきた都留文科大は、先行する数少ない大学だと言えるでしょう。

おそらく都留文科大では、すでに自覚されているこ

とと思いますが、〈地〉と〈学〉という二つの別世界を繋げることは、容易なことではありません。私は、長く地域生涯学習の研究者として、いまは地方国立大学長として、この方法を探ってきました。異なった世界、そしてその中で活動する人を結びつけるためには、それぞれの世界に精通していなければなりません。

◇
精通すると言いますが、〈地域〉も〈大学〉も複雑な構成であり、単純なものではありません。

〈地域〉とは、対立や葛藤の渦であり、それを体現する人間関係の場です。また〈大学〉には、多彩な研究がありますが、それは個人的な人（研究者）によって行なわれています。地域に参加し、学ぼうとする学生は少なくありませんが、彼らもまた個人的な存在です。これを頭に示したのが、3・11後、例えば福島原発を巡る問題です。地域には、原発の利益を感じる人も居れば、

原発に対する重大な危害を感じる人も居ます。一方大学では、原発を促進するような研究者も居れば、原発の危険性を訴え、どう克服するのかということを研究する研究者も居るといふことです。

他方、産・学共同は、産の方で開発するテーマや利益が非常に狭いターゲットで焦点化されており、それに合わせる技術を探すことは大変ですが、探して合わせる事が出来ればあとは2倍にも3倍にも発展することが出来ます。しかし、地域にはあらゆる意見の階層があり、さまざまな利害対立があります。

こうした多彩な人々を繋ぐためには、〈地〉と〈学〉を媒介するプロセスにおいて、双方の人の個性、意欲、希望、苦悩をよく知り、寄り添い、そして出会いや対話の機会を創り、そして相互の希望と意欲が重なりあう接点を見出し、そして実際の共同の活動を創り出すという方法が不可欠です。しかもこのプロセスは、いつも調和的に展開するわけではありません。

その意味で、〈学〉の側において、「学問の自由」という原理が大切にされているように、相対する〈地〉の側にも「住民の学習の自由」、「意見表明の自由」というものが保障されなければ、〈地・学〉の共同は成り立たないのです。〈学〉の研究の成果を、学習の自由の無い、選択の自由の無い住民に提供するだけでは、単なる押し付けに過ぎません。これでは、住民一人ひとりが、自身自身の従来の考え方を共同学習によって発展させ、自己

の新たな認識と相互の合意を創り出していくことはできず、むしろ地域の分断を助長することになりかねません。



〈地・学〉の共同が、地域社会の発展のシステムとして機能するうえで、極めて大きな障害が生まれていることを指摘しておかなければなりません。そのひとつは、地方教育委員会制度を首長に従属させるといふ制度改革の方向です。「教科書採択などは政治的中立が必要だが、社会教育や生涯学習にまで首長が口を出せないのはおかしい」とか「社会教育は主に成人及び青少年を対象に、本人の自主性や主体性の尊重を前提として、多種多様な内容で行なわれるものであるため、学校教育に比べると政治的中立性に留意する必要性は薄く、社会教育に関する事務については必ずしも教育委員会で執行されなければならぬ」とは言い切れない」などという議論、認識が、その制度改革の背景にあります。しかし、すでにふれたように地域の争点は、しばしば首長等の主張と、それと対立する主張として顕在化します。この対立的関係において共同学習が成立し、新たな判断、合意が形成されるように〈学〉は貢献しなければなりません。

「住民の学習の自由」が保障されない条件のもとでは、〈地・学〉の共同、大学の地域参加は成立しないということをお断りしておきたいと思えます。

(やまもと けんじ・和歌山大学 学長)

都留市の「都留市文化会館」（通称YLO会館）が2013年度より「都留市まちづくり交流センター」と名称変更され、学習、交流、まちづくりの拠点としての役割をもつことになりました。

その施設の1階には「都留市まちづくり交流センター」として、従来からの都留市中央公民館があり、2013年度からは、活動をつづけてきた「都留市まちづくり市民活動支援センター」や、都留市社会福祉協議会の「ファミリー・サポート・センター」、「都留文科大学地域交流研究センター」のサテライト（分室）も設置されました。また1階には「交流室・幼児室」もあります。名称を新たにした「都留市まちづくり交流センター」には、その2階、3階に従来からの都留市立図書館があり、4階には大ホールがあります。

これらの施設を活用しながら、市民組織、行政、教育機関（公民館、図書館）がそれぞれの役割を生かし、さまざまな課題をかかえる市民各層と学生たちの学習、文化、福祉などの多面的な交流を生み出していくことが期待されています。

本特集では、その「都留市まちづくり交流センター」の出發を伝えようとしてきました。

「都留市まちづくり交流センター」の 設立経緯と趣旨

■ 相川 泰

都留市まちづくり交流センターの前身である「都留市文化会館」は昭和50年に設置されて以来、市民の生涯学習、文化活動の拠点施設としてその役割を担ってきました。

近年、本市においても少子高齢化の進行や核家族化、都市化の進展等に伴い、家庭や地域社会において、異なる世代が関わり合いをもつ機会が急速に減少している状況にあり、こうした社会環境の変化が、孤立した状況下で子育てを行なう親世代、自立のきっかけをつかめない若者、生きがいを得られず、介護の不安におびえる中高年や高齢者等が増大する状況をつくりだしている」と推測されます。

このような状況下、平成24年度に実施した都留市文化会館の耐震補強工事に併せ、老朽化が進む老人福祉センターを子ども・若者・子育て中の親・中高年・高齢者といった異世代の誰もが気軽に立ち寄り、交流し関わり合いを持てる世代間交流施設に改修し、施設も「都留市文化会館」から「都留市まちづくり交流センター」に名称変更しました。

この施設は、こうした社会環境の変化に対応した施策を展開するとともに、「都留市市民活動支援センター」の同施設へ移転、「都留文科大学地域交流研究センター」及び都留市社会福祉協議会のサテライトを同施設に設置することで、それぞれが有する機能を集積し、一体的に活用するとともに、日常的に連携のと

れる体制整備を進め、これまで文化会館が担ってきた生涯学習機能に市民活動並びにボランティア活動等の要素を加味し、さらに都留文科大学や都留市社会福祉協議会のもつ地域貢献機能を組み込むことで世代間交流はもとより、さまざまな分野のまちづくりに取り組む市民や学生、各種団体などの多彩な主体が世代や分野を超えて多様な学びと交流、まちづくりを実践できる施設としての運営が期待されております。

平成25年度からは、交流センター事業として、「暮らしに役立つみんなの広場」事業を実施しております。これは、地域の方々のさまざまな知識や経験、特技や資格を活かし、住民同士が出会い・ふれあい・育みあえる場を設け、暮らしに役立つ多彩な活動を通して相互理解を深めるとともにまちづくりを進めることを目的に展開されています。とくに都留文科大学生はその多くが県外から集っています。それぞれが各地で培った貴重な経験を新たな資源として都留市民に提供いただければと思います。

繰り返しになりますが、「都留市まちづくり交流センター」が、まちづくりに取り組む市民、学生、各種団体など多様な主体が世代や分野を超えて学び、交流し、まちづくりを実践していくための新たな拠点として多くの方々を活用されることを願うものであります。

（あいかわ やすし・都留市教育委員会）

「都留市まちづくり交流センター」の担い手からのメッセージ

「都留市まちづくり市民活動支援センター」からの報告と提案

池谷迪久

私が、「都留市まちづくり市民活動支援センター」のインストラクターに委嘱されて3年（センター長として2年）が経ちました。

私は、幼稚園から大学（昭和40年入学）・卒業後も都留で生活しました。社会人となつてからは、勤務地は「甲府」「富士吉田」でした。所謂「企業戦士」として、土・日も無く仕事に明けくれ、「市民活動」又は、自治会活動もままならないで退職しました。現在は、「少しでも地元」との思いで過ごして居ります。

「都留市まちづくり市民活動支援センター」（設立の経緯・詳細は、都留市ホームページの『まちづくり』をご覧ください）からの報告としましては、その設立以来10年、主に「協働のまちづくり推進会」の成長過程の「レール」作りであつたと思ひますし、9～12年前に各地域で設立されていった「協働のまちづくり推進会」も自立の時代に入つてきたように思ひます。

これからの「都留市まちづくり市民活動支援センター」の提案として、平成25年4月「都留市まちづくり交流センター」に移転し、その中に「都留文科大 地域交流研究センター」（出先）、都留市社会福祉協議会（出先）、中央公民館、当センターとの4事業体の協働が可能になりました。

以前から、「学生さんと交流を」との、また学生側から「市民団体の方と交流を」との意見がありました。が、どこが「窓口」か分からず、個人のつながりで紹

介しておりましたが、これからは、組織だつたつながりの構築が可能になつたと思います。

私の小・中学生時代は「教育実習」で学生と関わり、また当時は「下宿」が主で、学生は家人と関わり、地域の行事、例えば、各地区の「清掃」等で市民と関わり、「桂川祭」では各県人会での「仮装行列」で関わりと、いくつもの接点がありました。しかし、お互いが「遠慮」し合つているのが現状ではないでしょうか。都留市にとつても、人口の約1割を占める学生との交流を密にすることが有益になることは間違いなく、

「都留市のセールスマン」が大勢居ると考えると心強い限りです。卒業されて、結婚され、家族が出来て、学生時代を過ごした「都留」を訪問して頂く、このような関係、機会が増えたら素敵だと思ひます。それには、大学生と市民活動グループとの橋渡し役がお互いに必要になると思ひます。市民側は「都留市まちづくり市民活動支援センター」が窓口になり、大学側は「地域交流研究センター」（出先）がその役割を果たし、お互いが連携して活動していくのが理想だと思ひます。これからは、「協働のまちづくり推進会」も含め、活動していく考えであります。是非一度「都留市まちづくり交流センター」を訪問されご意見を頂ければ幸いです。

（いげや みちひさ・都留市まちづくり市民活動支援センター

センター長



みんなの広場での学生との交流



第5回市民活動団体情報交換会

学びのシェアと地域の活性化

公民館が目指す学びの場

■杉田規子

昨年4月、それまでの都留市文化会館が名称を改め、複合施設として「都留市まちづくり交流センター」がスタートしました。この複合施設には、従来からの中央公民館、市立図書館に加え、新たに「都留市まちづくり市民活動支援センター」、「都留文科地域交流研究センター」のサテライト、都留市社会福祉協議会のファミリー・サポート・センターが設置され、乳幼児から高齢者まで毎日多くの方が訪れ、利用されています。

私の所属する中央公民館では、生涯にわたって学び続ける生涯学習の推進を図るために、「はつらつ鶴寿大学」をはじめ、学級や教室などの講座を開いて学びの場を提供しています。

社会教育法では、公民館の目的として、「住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化」などを挙げ、その事業内容も規定しています。公民館の公共性の高さとその教育施設としての役割が大きいことがわかります。

「ただ漠然と『学びたい』と思っても、何をどう学べばいいのかわからない。……これは市民の皆さんからよく聞く声ですが、公民館ではそういった学習に関する相談もお受けしています。学びの動機は人それぞれです。仲間づくり、余暇の活用、教養を高めたいためなど、どんな理由でも学習する意欲さえあれば、公民館がお手伝いできることはたくさんあります。まず、興

味をもって学び、その習得したことを相互に伝え合い、共有し、交流しながら「学びの輪」を広げていくことで、個人の元気が、ひいては地域の元気になります。

この「学びのシェア」が助け合いや生きがいづくり、健康づくりにもつながっていくものだと思いますが、公民館だけでなく、できることにはどうしても限界がありますが、「学びの輪」を広げていくためには、いろいろな機関や団体などとの連携が欠かせません。「都留市まちづくり交流センター」の発足は、まさに、公民館事業の拡充に向けた好機の到来だと思います。とくに、都留文科大学を有する都留市の特色を生かし、市民と大学生の交流をさらに活発にすることで大きな可能性が広がると思います。

市民が心身ともに元気で心豊かに暮らし、集い、交

流の輪を広げて地域が活性化していくまちづくりを進めるために、今後も公民館は幅広い学びの場を提供し、その役割を担っていきたいと思います。

(すぎた のりこ・都留市中央公民館)



鶴寿大学の様子



鶴寿大学の様子

まちづくり市民交流と都留市立図書館の取り組み

交流の先にめざすもの

■青池恵津子

都留市立図書館は、1975年、都留市文化会館（以下「文化会館」※1）のオープンと共に、その2階で図書館活動を行ってきました。昨春、文化会館の「都留市まちづくり交流センター」への改組を受け、私たちは図書館の運営方針に「都留市まちづくり交流センター」の機能を活用した図書館サービスを掲げました。つまり、中央公民館に加え、新たに「同じ屋根の下」となったファミリー・サポート・センター、「都留市まちづくり市民活動支援センター」、「都留文科大学地域交流研究センター」（サテライト）と、主管部署も機能も多様な組織と連携して活動することとなったのです。

※1 通称「YLO会館」、県が提唱するYLO会館構想により県下に建設された総合施設の一つ。「Yは若人、Lは婦人、Oは老人をさし、総称して市民全体の文化、福祉会館を意味する呼び名」（『広報つる』1975年11月号）

私たちはこれまでも市民、他組織と連携・協力して活動を行ってきました。とくに都留大との連携は当館の特色となっています。附属図書館との相互協力、大学生による集會行事、さらにこの10年間は「都留文化大学地域交流研究センター」のフィールド・ミュージアム部門との共同による企画展やイベント等、数多くの取り組みがあります。そして、文化会館が「自発的で多彩な学び及び交流を促進し、文化的教養を高め

得るような環境を醸成するとともに、社会福祉の増進に寄与する※2」センターとして再出発するに際し、図書館も自らに意識改革を求めました。それは、単なるフロアの「間借り」ではなく、「都留市まちづくり交流センター」の機能に有機的に連なる構成員として活動を再考することでした。以下、1〜4がその実践例です。

※2 市HP http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/forms/info/info.aspx?info_id=14853

1 ファミリー・サポート・センターとの協働

春のこども読書週間企画、ファミリー・サポート・センターオープン記念として、社会福祉協議会と共に『三世代交流つみ木ひろば』を開催。「みんなで創ろう！夢のまち」とよびかけ、「都留市まちづくり交流センター」の出発にふさわしい企画となりました。【写真1】

2 まちづくり市民活動支援センターとの連携

市内7地域「協働のまちづくり推進会」の協力を得て、秋に4地域の文化祭に向き「図書館利用登録窓口」を開設。【写真2】

3 都留大地域交流研究センターとの連携

都留大フィールド・ミュージアムとの共同企画により『夏休み昆虫写真展』を開催。（『地域交流センター通信』24号に詳報）

4 『暮らしに役立つみんなの広場』への協力

「都留市まちづくり交流センター」内各部署が共催・協力して定期開催するワークショップに参加、関連図書を提供。

以上、どの取り組みも顔の見える交流の場として多くの方に参加していただき成功しています。けれど、集客数を数え一喜一憂し浮き足立つのではなく、連携や協力からうまれる交流のその先に、広く図書館の利用を啓発・促進し、以って市民の学びを支え、国民の知る権利を保障するという図書館の基本的役割を見据えなくてはならないと考えています。

（あおいけ えつこ・都留市立図書館）



【写真2】地域の文化祭等で図書カードを発行（9月～11月）



【写真1】「みんなで創ろう！夢のまち」（4月29日）

学生との出会いをおいて

～ファミリー・サポート・センター～

■ 杉田マエ子

私が、都留市社会福祉協議会に勤務して1年が経ちました。

ファミリー・サポート事業の立ち上げから関わり、H25年3月稼動し、ファミリー・サポート・センターの拠点も都留市社会福祉協議会から「都留市まちづくり交流センター」に移り、今に至っています。

保育士という現場の仕事から、ガラッと違う仕事に就き、戸惑い、驚き、不安が先行して何度も何度も立ち止り迷いました。ここに至るまで色々な人との出会いや支えがあり、ゆっくりですが前に進んでいます。

ファミリー・サポート事業を進めていくなかで学生との出会いがあります。立ち上げの時に、一緒に交流室の壁面づくりを手伝ってくれたYさんとAさん、作業しながら色々な夢や自分のことを語ってくれ、話しながら自分のことを模索しながら頑張っている姿、うかがえました。お話しをするなかで、仕事で立ち止まって、振り返ってばかりいる私に勇気をくれました。

また、ファミリー・サポート事業のイベントで、都留文科大学の学生とコラボしてミニ交流会を計画しました。「地域交流研究センター」の本田さんからの紹介で児童文化研究部に影絵、手遊びをしてもらいました。大きい道具のセッティングや当日の真摯な取り組みに感心しました。学生とはあまり接点がなかった私には、この出会いは新鮮で楽しいものでした。そして

学生と向かい合うなかで純粋に取り組む姿、また、ひたむきに向かい合う姿に、改めて自分を重ねて見つめなおすきっかけになったり、パワーをいただきました。

また、会員向けの養成講座に参加してくれた学生もいました。大事な時間を割いて2日間の講座に参加してくれました。こんな素敵な学生たちと接するうちに仲良くしたい、もっと付き合っていきたい、また、学生の力、良さを地域に活かしていきたいと思いました。「都留市まちづくり交流センター」は、色々な世代が集い、交流する場所を目指しています。学生などの若い世代からパワーをもらいお年寄りから知恵をいただいて、お互いに関係をつくり、交流をしていけたら、名のとおり「まちづくり交流センター」になると思います。市民に学生を紹介したり、またイベントにもお手伝いしてもらい、もっと市民と学生が親密になり、学生が自ら活動できる居場所を作り、発信できる拠点になって欲しいと思います。それがまちづくりに繋がると思います。

ファミリー・サポート事業のなかでもこれから色々なイベントを計画します。そのなかで学生とコラボして出来るような企画、交流の場を探していきたいと思っています。また、交流室は、たくさんの人が訪れます。そのなかで出会った人から暖かい言葉をもらったり、なげない会話の中から優しさをもらったりします。これからも一つひとつの言葉、出会いを大事にして

ファミリー・サポート事業を展開していきたいと思
います。

(すぎた さえこ・社会福祉協議会職員

ファミリー・サポート・
センターアドバイザー)



保育サポーター養成講座



ファミサポミニ交流会の様子

都留文科大 地域交流研究センターと まちづくり交流の新たな取り組み

■ 杉本光司

都留文科大には、文学部の中に五つの学科と多くの附属機関があります。そのなかでも、地域交流研究センターは、学科の枠を越え、地域との交流や研究活動を支援するために設置された機関で、今年で10年目を迎えています。これまでも市民の方々とともに、さまざまな活動や研究に学生や教員が取り組んでいました。昨年4月に都留市文化会館が「都留市まちづくり交流センター」として整備されるにあたり、地域の方々に大学をより身近に感じてもらい、更に深く知って頂くことや交流促進のため地域交流研究センターのサテライトを設置し、新しい取り組みとしてスタートいたしました。

地域交流研究センターには都留文科大の特色を生かした地域に根差す活動の柱として、三つの部門を設置しています。フィールド・ミュージアム部門、発達援助部門、そして、くらしと仕事部門です。フィールド・ミュージアム部門では、自然観察会の開催、機関誌『Field・Note』の発行、カジカとカワラナデシコの保全活動、ミュージアム都留との連携事業等を行なっています。発達援助部門では、市内の小中学校での学生・アシスタント・ティーチャー活動(SAT: Students Assistant Teacher)の実践、地域教育相談、地域情報教育支援、そして、地域美術教育支援等の活動を行なっています。くらしと仕事部門では、地域で暮らす人々が担い手となる活動支援を行なっています。

す。そのほかに、出会いと交流の場をつくるインナーフェイス活動として、『地域交流センター通信』の年2回の発行や、地域のニーズに応える地域貢献活動(公開講座、文大名画座など)、本学の知的資源を生かした地域交流プロジェクト(たんぼクラブ、都留市谷村第二小学校の谷ニラボなど)を行なっています。

こうした多彩な取り組みをつなぐキーワードとして「地域」があります。しかし地域交流研究センターの知名度はまだまだ低く、十分活用されていないのが現状です。しかし、サテライト開設後は、新たな分野での学生ボランティア募集、地域の学習会への講師派遣、公民館や社会福祉協議会との連携事業等の要望が寄せられ、一部については実現されています。

今回のサテライト設置を機に、地域交流研究センターと地域がこれまで以上に連携を深め、活気あふれるまちづくり活動が進むことを願っています。

(すぎもと てるじ・地域交流研究センター センター長)



SATの様子

| | | |
|--|--|--|
| <p>■(1)フィールド・ミュージアム部門</p> <p>『都留市は全体が自然博物館』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生きものの生態調査、回書館、博物館、駅との連携による展示 ・「フィールド・ノート」の発行(年4回、500部)、 ・学校との連携による講座開催 ・キャンパス内に住むムササビライブカメラ放映 ・地域に残る写真等のデジタル・アーカイブ化 ・標本などの資料を理科教材として貸出し | <p style="text-align: center;">地域交流研究センター</p> <p style="text-align: center;">センター運営委員会</p> <p style="text-align: center;">副学長、センター長、各部門責任者、広報委員長、各学科代表(6名)、市民代表(まちづくり市民活動支援センター長)</p> <p style="text-align: center;">センター会議</p> <p style="text-align: center;">センター長、フィールド・ミュージアム担当、SAT担当、教育相談担当、情報教育担当、美術教育担当、暮らしと仕事担当、センター通信担当、事務局職員</p> <p>■(3)暮らしと仕事部門</p> <p>農業・林業を軸とした地域との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の農業系クラブと地域を結び ・地域の山林調査を軸とした実践、研究 ・暮らしに関わる講演会 | <p>■地域課題の解決に向けた活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域交流研究フォーラム、現職教員教育講座、市民公開講座、県民コミュニティレッジ、文大名画座の開催 ・センター通信の発行(年2回、3000部) ・山梨県地域教育フォーラム南都留集会所への支援 ・教育委員会との連携による「都留市子ども教室事業」への支援(学生の募集、子ども公開講座) ・社会福祉協議会との連携による、学生と市民をつなぐ「ボランティアひろば」の開催(毎月第4水曜日18:30) ・学生が主体となった、18歳以上の知的障がい者の余暇支援事業として「いこいのひろば」の開催(月1回) <p>■地域を知る教養教育講座の開催</p> <p>全国から来た学生が地域を知る講座を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「山梨学」(山梨県の事業と連携) ・「地域の生きもの地図の作成」 ・「地域の自然・人を取り、伝える」 - 「都留学」の開設準備 <p>■センタープロジェクト(H25年度)</p> <p>地域をフィールドとした新しい取り組みを支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放課後理科実験教室(谷ニラボ) ・地域特産物(アオハタ大豆)を活用した新製品開発 ・たんぼクラブ(稲作体験の実践) |
|--|--|--|

地域福祉とまちづくり交流

「暮らしに役立つみんなの広場」の可能性

■ 森嶋美子

地域のなかには、さまざまな知識や経験、特技や資格、人脈などまちづくりに有効な力を持った人材が豊富にいます。また、自分にできることで誰かの役に立ちたい、社会の役に立ちたいと願っている人々も潜在しています。

そこで、市民の主体的な参加の環境を創ることを大切に考え、地域のなかから人材を発掘し、「都留市まちづくり交流センター」の1階にある交流室を活用して、住民同士が出会い・ふれあい・育ちあえる場を設け、暮らしに役立つ多彩な活動を通して相互理解を深めるとともに地域の連帯感を高め、より豊かに、より良く暮らせる地域づくりを進めることを目的として、平成25年9月から「暮らしに役立つみんなの広場」を開催しています。

この活動を通じて、都留文科大地域交流研究センター・都留市まちづくり市民活動支援センター・都留市社会福祉協議会三者に加え、中央公民館の企画、地区ボランティアコーディネーターや都留市立図書館の協力と、連携・協働体制を整えることができました。

毎回、参加者の要望を受けてバリエーション豊かなプログラムを実施していますが、ボランティアやまちづくり関係者、中央公民館学級の指導者、子育て真最中の母親、「都留市まちづくり交流センター」の職員など、福祉だけではなくまちづくりや教育など幅広い分野の方々に協力いただいで実施していることが、

大きな成果であり特色となっています。

回を重ねるごとに口コミで広がり、市内のいろいろな地域から参加者が集まり、初めて参加する方も増え、世代間交流、知恵袋交換など交流の輪が広がっています。

今後は、文大生との交流促進、男性向けの企画、開催回数、日時の設定など、現在の課題解決に取り組んでいきます。人々の生き方・暮らし方が多様化する昨今ですが、新たな出会い、新しいことに挑戦する機会、生活文化や趣味の交流などさまざまな要素を織り交ぜ、地域の皆さんがライフステージを経ていくなかで好機に参加できるよう地域に根付かせ、より楽しい魅力的な活動へと発展させていきたいと思っています。

(もりしま よしこ・社会福祉法人都留市社会福祉協議会
福祉活動専門員)



第16回ポケットティッシュケース作り (2014年1月21日開催)



第12回クリスマスリース作り (2013年11月26日開催)

百人一首のイベントを通して

■ 中里真琴

皆さんはじめまして、こんにちは！都留文科大のサークルの中里です。私たちは去年の5月に結成したばかり。来年度には和室の使用や部費の申請も出来ると思うのですが、今のところは大学の隅でひっそりと活動をしています。百人一首に興味がある友達に声をかけて集めた部員のため、競技かるたに関しては全員初心者。部としての申請方法や学校の制度もわからない一年生だけだったので、初めは手探り状態でした。主に6人で活動していますが、他の部の方も掛け持ちで入部してくれたため15人近くの部員が集まりました。

去年の11月30日、私たちは「都留市まちづくり交流センター」の和室で小さなイベントを企画しました。きっかけは、大学の和室の使用許可が下りず、畳を使った本格的な練習が出来ずに困っていたところ、「都留市まちづくり交流センター」の方からは是非「センター」の和室を使ってくださいとのお話をいただいたことでした。練習をしながら、ここで地域の方を対象にイベントを開いてみてはどうかとの話があり、部員一同不安を抱えながらの開催に至りました。

あいにく当日は、マラソンのイベントや図書館の休日等が重なってしまい参加者が集まらなかったのですが、小学生の女の子2人と、ポスターを見てくれた文大生2人が来てくれました。イベントの内容は、かるたとしての百人一首に触れてみようということ

テーマに、和歌についての簡単な説明、まずは札に触れてみるという目的からの坊主めくりという絵札を使った簡単なゲーム、部員が選んだ和歌20首でのかるた取り、部員による競技かるたの実演でした。少しでも暗記して札が取れるようにと、選んだ20首は簡単な語呂合わせとイラストを付けた用紙を配り、またA4サイズの「巨大札」を20枚作成し、小学生にも楽しんでもらえるよう工夫をしました。初めは人が集まらずどうしようと思っていたのですが、参加してくださいと皆さん楽しんでいただけたようなので開催してとてもよかったです。

小学生の2人に話を聞いたところ小学校で百人一首をやっているそうなので、またこういった機会があれば、今度は小学校にもお話をししてポスターを貼らせていただけたらと考えています。その時はぜひ、皆さんもお立ち寄りください！

(なかぎと まこと・国文学科1年)



皆で和歌の暗記に挑戦！



かるた取りの様子

囲碁・将棋の輪を広げるために

■吉田耕平

2013年12月15日(日)。私たち学生サークル「盤上ゲーム研究会」主催で、「都留市まちづくり交流センター」で「囲碁・将棋交流ひろば」というイベントを行いました。「都留市まちづくり交流センター」1階の和室には、碁盤・碁石、将棋盤・駒が多数置かれているものの、使用される頻度が少ない、もって活用できないだろうか。そのようなわけで、「都留市まちづくり交流センター」の方から私たちにお誘いがかかったことが、今回イベントを開いたきっかけでした。私たちとしても初めての試みのため、十分な告知ができたわけではありませんでした。それでも、当日は小学生、高校生から一般市民の方、延べ約30人の方々にお集まりいただき、思い思いのままに対局を楽しんでもらうイベントになったかと思えます。

今回のイベントを通して私が感じたことは、都留市での囲碁や将棋に対するニーズが思っていた以上に多いということだと思います。当日は私が予想していたよりも多くの小学生が足を運んでくれました。事前にも「都留市まちづくり交流センター」に子どもに囲碁・将棋を学ばせたいという保護者からの問い合わせがあったそうです。また、立ち寄った学童保育所の職員の方にも、学童で子どもたちに囲碁・将棋の相手をしてほしい、と話しかけられました。

囲碁・将棋はルールさえ覚えてしまえば、体力に関係なく老若男女誰でも楽しめるものです。私の知る限

りではありますが、現在市内では子ども教室、学校の部活動、老人クラブなど世代別で集まる場はあるようです。したがって、こうした「点」をつないで「線」を作っていく、今回のような世代を超えて集まる場を創っていくことができれば、囲碁・将棋の楽しみも広がり、学生・市民の交流にも一役買うのではないかと思います。

最近では、囲碁・将棋の普及活動のさまざまな試みが世間でも注目されています。若年層を対象にした普及活動や、小学校・大学の授業での利用、まちづくりの一環としての利用などが挙げられます。県内では北杜市での事例が有名でしょうか。ただ、そういった大々的なことでなくとも、今回のような場ができれば皆さんが趣味として楽しむ場を創っていけるのではないかと思います。

(よしだ こうへい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年)



囲碁・将棋ひろば 小学生と高校生の対局



囲碁・将棋ひろば 高校生と高齢者の対局

大雪の日、1週間で起きたこと

——都留市まちづくり交流センターの1週間——

■本田祐士

2月15日(土)

「都留市まちづくり交流センター」(以下「交流センター」)の駐車場に1メートル以上の雪が積もった。1時間かけて駐車場の中心あたりに人が1人通行できる道幅の通路を正面玄関まで人力により開設した。

◇

2月16日(日)・避難所開設1日目

「交流センター」は2月14日(金)から降り続いた雪により、帰宅が困難になった方へ避難所として開放することになった。

正午前、大型建設重機によって、車両の進入が可能な道幅に拡張される。

午後3時、避難者の受け入れを開始する。前日には市役所や消防署、ホテル、自家用車などに宿泊した方を受け入れました。この日のうちに「交流センター」に設置された名簿に記載された方の人数は102名にのぼりました。そのほとんどは、富士吉田市や西桂町などの近隣市町村に住む方でした。

この日、「交流センター」には、交流センター職員2名、市職員2名が避難所に宿泊する。

2月17日(月)・避難所開設2日目

午前11時前、災害対策本部から正午12時に消防車により富士吉田市まで先導するという連絡が入る。これにより、30〜40名ほどが退所する。

夕方には東桂コミュニティーセンターと消防署にある避難所の閉鎖が決まり、そこへ避難されていた方が「交流センター」へと移動してきました。

しかし、東名高速道路、御殿場方面への道の交通規制の解除により、この日の夕食のころには40名足らずの人数になりました。

夕方、社会学科と比較文化学科に所属する3名の女子学生が避難している方へ、風呂の貸し出しを申し出てくれました。この日の夕食の前後で計7名の女性を利用され、とても喜ばれていました。

午後10時50分、中央高速自動車道が午後11時に開通するという情報が入る。この情報をお知らせしたところ、15名くらいの方が退所されました。

この日、「交流センター」には、交流センター職員2名、市職員1名が宿泊する。

2月18日(火)・避難所開設3日目

朝になると、電車で都留まで来た方、道志方面へ向かう方など、帰れない方ばかり9名が残った。それも昼過ぎになるとそれぞれ帰る方法が見つかり、午後2時に全員退所され、避難所は閉鎖となりました。

◇

2月19日(水)

午後から「交流センター」の駐車場の雪かきを開始。少しずつではあるが、平常通りの業務を再開する

ための準備が始まる。

2月22日(土)

駐車場を覆っていた雪が隅に寄せられ、駐車場が使用できるようになり、平常通りの業務を再開しました。

(ほんだ ゆうじ・本学職員)



建設大型重機による除雪の様子
(2014年2月20日撮影)



雪の中の都留市まちづくり交流センター
(2014年2月16日撮影)

教養科目 『地域交流研究Ⅱ』

— 生きものの地図をつくる —

■西 教生

地域交流研究Ⅱの授業では、2013年も前期に「生きものの地図をつくる」をテーマにして、身近に見られる生きものの分布調査を実施しました。調査対象は、大学周辺の9種の樹木、タンポポ、ツバメ類、カラス類などです。受講生にはこのなかから、興味のあるものを選んでいただきます。その後はグループにわかれて調査をし、結果をまとめます。まとめをした後は、成果を発表するために、グループごとに1枚のパネルを作りました。作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示しました。

この授業では、野外に出て調査をすることに重きを置いています。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができます。しかし、足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからです。受講された学生のみなさんには、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持つてもらいたいと願っています。

今回、地域交流研究Ⅱで樹木の調査を担当した国文学科の前澤志依さんに授業の感想を寄せていただきました。

(にし) のりお・本学非常勤講師

■定期的な観察からの発見

■前澤志依

地域交流研究Ⅱで私は、都留文科大学の裏にある楽山公園から入る遊歩道の樹木を調査するグループでした。11種類の樹木を対象にし、毎週同じ時間帯に樹木の生長のようすを記録していきます。最初はハナイカダの蕾ばかりが多く見られ、観察のなかで蕾のハナイカダ以外の植物を発見するという事はなかなかありませんでした。

しかし、観察の回数を重ねるにつれてハナイカダは蕾から花を咲かせ、実になる様子が見られるようになりました。また、花がついたことよって他の樹木の種類も判別できるようになりました。この観察して発見したことを分布図にまとめると、どの植物がどの辺に生息し、場所が違くと成長の進み具合も違うといったことも見えてきます。

1度観察しただけでは見つけられなかった植物の様子も回数を重ね、観察の方法に慣れてくると広い範囲でおこなうことができ、より細かい点まで気にすることができそうです。

いつも通過していた場所なのに、時間を経て対象となる植物を発見することも度々ありました。そのような記録も地図に書き記すと、記録として後々振り返ることができそうです。ただ観察しただけでは見えてこなかった植物の分布も地図に落とすことでどの辺に群集しているのかなどがよくわかり、できあがった地図から、新たに得られた発見や観察を終えたことの達成感がありました。自分の積み重ねた経験を記録として残

し、自分のものにするという点で大変有意義な授業でした。

(まえざわ) しより・国文学科4年



地域交流研究Ⅱの授業の成果は、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎内に展示され、多くの人に見て頂きました。

教養科目 『地域交流研究Ⅳ』

— 地域の交流誌をつくる —

■北垣憲仁

地域交流研究Ⅳの授業では、学生自ら取材対象を決め、記事を書き、冊子を完成させました。この授業は、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌『フィールド・ノート』の実践をもとに行っています。受講した学生に感想を記していただきました。

(きたがき けんじ・本学特任教授)

■自分で成し遂げるといふこと

■若尾奈津美

今回、地域交流研究Ⅳという講義を受けるにあたって、まず印象に残ったことは、初回の授業での先生の言葉だった。「この時間では、文章を作成し、ひとつの記事を書き上げるという作業をすべて自分でやらせてもらいます。好き嫌いがはつきりと分かれる授業なので、よく考えうえで受講するか決めてください。」私は今まで、自分の力だけで何かを成し遂げるようなことをしなかつた。いつもそこには誰かの手助けがあり、つい誰かに頼ってしまう自分がいた。私はそんな自分を変えたかった。先生のこの言葉を聞いたとき、「良い機会だ、絶対受講したい！」そう思って受講を決意した。

お店に行つてアポイントメントをとることから始まり、取材から記事の書き上げまで、全て自分で行なつた。緊張と期待で胸がはずんだ。全てがはじめての経験で新鮮だった。記事が出来たときの達成感は何とも言えないほど大きかった。

この講義を受講したことで、自力で成し遂げることの難しさと同時に、楽しさを知ることができた。頼る対象が自分しかない状況は、自分を奮い立たせた。苦労して得た結果は、自分にとって力となり、自信となり、また視野も広がった。この経験を生かして、これからの人生を豊かにするために、さまざまなことに時には自力で挑戦してみようと思う。

(わかお なつみ・英文学科1年)

■出会いの感動を伝えたい

■宮下ひかる

「インタビュー…？面白そう！」これが、今回私が受講を決めた動機です。しかし、授業のほとんどは、さまざまな人が書いた文章を読むことと、自分の原稿を読んでもらうことに費やされます。私は元々、文章の内容を読み取ることが苦手でしたが、回を重ねるごとに、書き手の伝えたいことを考える余裕が生まれてきました。

目的のインタビューですが、実際にするのは1度だけ。それも、相手の方のお話しが想像以上に魅力的で、私が予想していた話の流れにはなりませんでした。思ってもみなかった考え方を得られた充実感と同時に、話しを聞く難しさも改めて感じました。その内容



受講者32名で完成させた冊子『COLOR』。完成した冊子は、取材などでお世話になった地域のかたがたに配布されました。

を記事としてまとめる作業をしていくうちに、多くの人に伝わる文章、というものを意識するようになります。それは、大学の課題で出されるレポートとは違い、自分の感情を基に作成します。資料が有るわけでもなければ、難しい言い回しで誤魔化せるものでもありません。自分の感動を文から感じてもらうために、視点を変えつつ編集を重ねました。

この授業を通して一番感じたことは、伝えたいことを明確にする大切さです。どんなに素晴らしいお話を伺っても、それを表現できないことほど勿体ないことはありません。素敵な出会いをしたい、その感動を表現してみたいという人にはお勧めの授業です。

(みやした ひかる・比較文化学科2年)

教養科目 『地域交流研究Ⅲ』

—「山梨」を知り、歩き、知らせる—

■杉本光司

この科目は、山梨県観光部における「やまなし観光カレッジ事業」との提携により、表に示すように、県内各分野の第一線で活躍している方を講師に招いての10回の講座、土曜日開催の2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ボランテニア参加という3つの要素から構成されています。

山梨県知事発行の修了認定証を受け取るためには、①7回以上の講座出席、②1回以上のフィールド・ワーク参加、③1回以上のイベント・ボランテニア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という4つの条件をクリアしなければなりません。今年度は受講者135名というなか、修了認定者が105名というこれまでにない人数となりました。受講のきっかけも先輩から薦められたという声も多く、この講座が着実に浸透しているようです。毎回の講座でも気になったことばや感想を提出してもらい、それを講師の方にお送りしております。

講座だけでなく、実際に現場に出かけて行き、その魅力に触れる機会として2回のフィールド・ワークを実施しています。ここではミニ・レポートとして視察先に応じた設問が用意され、一日の感想も記入して提出します。次に4名の参加者の感想を紹介させていただきます。

◇

| 日 程 | テーマ | 講 師 | 所 属 |
|---------------|---------------------------|---------|-----------------------|
| 2013/10/10(木) | 山梨と富士山 | 白石 浩隆 | ひめねずみ社 |
| 2013/10/17(木) | 山梨県の概要と観光振興 | 観光部職員4名 | 山梨県観光部 |
| 2013/10/24(木) | 山梨県の歴史 | 堀内 真 | 山梨県立博物館 |
| 2013/11/7(木) | 郡内織物の新しい挑戦 | 前田 市郎 | 甲斐絹座(前田源商店) 取締役 |
| 2013/11/14(木) | 甲州印傳 | 上原 勇七 | (株)印傳屋上原 会長 |
| 2013/11/21(木) | 山梨の果実 | 内堀 圓 | 甲斐いちのみや金桜園 社長 |
| 2013/11/28(木) | 山梨のワイン | 長谷部 賢 | 長谷部酒店 勝沼食堂Papasolotte |
| 2013/12/5(木) | 地域活性 | 赤松 智志 | 富士吉田 地域おこし協力隊 |
| 2013/12/12(木) | 山梨の方言『Can you speak 甲州弁?』 | 五緒川津平太 | 作家(本名:大堀 卓) |
| 2013/12/19(木) | 都留市の魅力 | 依田 博江 | 都留市役所 産業観光課 |

| 日 程 | テーマ | 所 属 |
|-----------|------|---|
| 11月9日(土) | 郡内地域 | 富士吉田市歴史民族博物館、山梨県立富士ビジターセンター、フジヤマミュージアム、富士浅間神社、尾県郷土資料館 |
| 11月30日(土) | 国中地域 | かいてらす、山梨県立博物館、大日影トンネル、シャトー勝沼 |



鉄道トンネルの跡地「大日影トンネルワインカーブ」でワイン貯蔵を学ぶ



「地域活性」と富士吉田市地域おこし協力隊の赤松智志さんから学ぶ

■源 春風（国文学科1年）

国文学科なので初のフィールドワークだったので
すが思っていたよりも楽しく嬉しかったです。都
留に住んでいると車がないと行きづらい場所ばかり
なので…。とくに北口本宮富士浅間神社は造りが面白
くて自分でも個人的に訪れたいです。ビクターセン
ターは展示が細かくてもっとゆっくり見たかったで
す。友人に話せる豆知識という感じなのが興味を持ち
やすく良かったです。私はまだ富士山に登ったこと
が無いのですが登る前にもう一度訪れたいと思いま
す。石川県から山梨に来て、本当に富士山しかないな
でも別にただ大きい山だしと思っていたのですが、フ
ジヤマ・ミュージアムで映像と絵画を見ていたら、だ
んだん私も富士信仰に染まりそうでした。学校から富
士山が見えればもっと身近に感じられて興味が湧くの
になあ。郷土資料館では古民家や折り機が見られ、自
分では決して来ないような展示だったので勉強になり
ました。とくに前回郡内織りについて学んだばかり
だったので復習にもなりました。今、家に帰って調べ
たいことは富士山の女人禁制についてです。

■柘植大在門（初等教育学科1年）

歴史民俗博物館では富士山周辺の昔のくらしや「富
士講」と呼ばれる人たちについて知ることが出来て良
かったです。富士浅間神社では日本最大の木造鳥居が
工事中だったのが残念でしたが、世界遺産に触れるこ
とが出来て良かったです。ビクターセンターは、以前
行ったことがあったのですが、先生も仰っていた様に

展示が変わっていて富士山についてより細かく知るこ
とができました。フジヤマ・ミュージアムでは富士山
に対してさまざまな捉え方をしている絵画を見ること
ができました。尾県郷土資料館は昔の教育水準や教科
書、子どもたちの生活が良く分かって今後に活かせる
うです。全体を通して吉田の方の施設では富士山につ
いて深く学ぶことができて、また、貴重な資料に触れ
ることができて良かったです。富士山は五合目までし
か行ったことがないので、ぜひ頂上まで登ってみたい
なあと思いました。都留の資料館では、私は教職を目
指しているの、学校の変化などを学べて、また、昔
の試験などもわかって有意義でした。今日一日楽し
かったです。

■李 在夏（イ・ジエハ）（比較文化学科3年）

今回で山梨の全てが分かったとは言えませんが、一
部を見ることで山梨の魅力を感じました。博物館で山
梨の歴史を学んだし、大日影トンネルとシャトー勝沼
で日本の鉄道と日本のワインについて知ることができ
ました。山梨にいなながらも知らなかったことが多かつ
た気がします。これからでも、もっと山梨について興
味を持たないと、という考えをもつ良いチャンスであ
ってとても良かったです。機会があればもう一回、
今回の様なフィールド・ワークに参加したいと思います。

■桐生実佳（国文学科2年）

フィールドワーク1、2回への参加を通してですが、
山梨はこんなに楽しいんだなと思いました。今まで友

人でも一人でも山梨県内で遊びに行くことがな
かったので発見ばかりでした。「ここが良いらしい」
という情報だけでなく、実際に行って体験した方が
やっぱり良いんだなと思いました。どこを見ても果樹
園があつて、花が咲いている時期や収穫の時期にも
行ってみたいなと思いました。この授業をとっていない
人にも、もっと山梨を好きになってもらえたら良い
なと思います。



1月29日には、「山梨魅力メッセンジャー」事業と
の連携講座時代も含め、最多の人数となりました「や
まなし観光カレッジ」修了認定者105名に対して認
定証授与式が開催されました。しかし、これで、め
たく「地域交流研究Ⅲ」も成績認定となるわけではな
く、更に課題レポートの提出が義務付けられます。

（すぎもと てるじ・本学教員）



厳肅な富士浅間神社の参道から本殿を目指す

● 第16回南都留地域教育フォーラム

テーマ「子どもたちの教育は

地域全体で担う」

期日…平成25年10月31日(木)

場所…富士吉田市立第一小学校

南都留地域教育フォーラムを

開催して

■小林統也

第16回目となる南都留地域教育フォーラムがおよそ四〇〇名の参加者により開催されました。主催は南都留地域教育推進連絡協議会及び富士・東部教育事務所によるもので、構成する団体は、幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学、保護者、教育委員会、教育委員会関係機関、女性団体、商工会、青年会議所、児童福祉に関わる行政機関、警察署など二二四を数えます。

南都留地域教育フォーラムの特徴の一つは、「地域連携・地域交流」をキーワードとした教育実践活動による研究協議活動であることです。さまざまな教育問題について、地域に存在する多くの団体の力を生かした地域の教育力の発揮と向上によって効果の高い教育活動の展開を求めるための研究の機会です。子どもの健全な育成のため、人間としての調和のとれた成長のため、学校間の連携・交流はもちろん、教育関係団体、

地域の各団体との連携・交流によって地域ぐるみで子どもを育てる教育活動が根底に存在します。

本年度は、全体会のアトラクションとして吉田高等学校の箏曲部に演奏をしていただきました。山梨県高等学校の芸術文化祭において優秀な成績を収めており、優雅な音色に会場から大きな拍手が贈られました。この高校生たちもやはり地域の教育力によって健やかな成長をしつつ現在に至っています。日本古来の楽器に取り組む立派な大和撫子たちを地域で育ててきたことに拍手が贈られたととらえてもよいのだと思います。

分科会は、七つの部会に分かれて行なわれ、各分科会とも今日的な教育問題の解決のために連携・交流活動のよさを生かした実践報告が行なわれました。活動内容について理解や考えを深めるべく、多くの質疑が出され、自己の団体に当てはめて考えたり、自分がその団体に所属しているつもりで見つめたりして真摯な討議が行なわれました。何よりありがたいのは助言者として大学の先生方から実践活動の裏付けとなる理論や考え方についてご指導をいただくなど、連携・交流活動の推進にご尽力をいただいていることです。本年度は、都留文科大学から七名の先生方にご協力をいただきました。

多くの参加者から南都留教育フォーラムの継続と発展を願う声が寄せられています。子どもたちの育成に関わる方々のご支援とご協力をお願い致します。

(こばやし とつや・富士・東部教育事務所)

地域教育支援スタッフ 主幹

教育フォーラム分科会一覧

| 分科会 | 部会テーマ | 助言者 |
|---|---|----------------------------------|
| 第5分科会 行政・地域団体・学校部会 —地域から子どもへ、 子どもから地域へ— | ①地域・学校をつなぐ「生命(いのち)の授業」～一ばん大切なあなたの生命(いのち)～ 富士・東部保健福祉事務所管内愛育連合会 会長 安留 紀久子 | 都留文科大学 初等教育学科 教授 田中昌弘 |
| 第6分科会 特別支援教育部会 —成長を支える連携— | ①音楽療法を通しての子どもの発達 ～発達を踏まえての連携～ 富士吉田市立マザーズホーム 園長 市川 俊子 " 保育士 山本 あさ子 | 健康科学大学 |
| | ②一人ひとりのニーズに応えた支援を行うために ～一人への支援がみんなの支援・育ちにつながる～ 県立ふじざくら支援学校 地域支援担当 特別支援コーディネーター 教諭 芦沢 マミ | |
| 第7分科会 PTA部会 —子どもと地域をつなぐ— | ①学校、家庭、地域をつなぐあいさつ運動 ～365日地域連携～ 富士吉田市立下吉田中学校 PTA会長 渡邊 秀樹 | 都留文科大学 地域交流研究センター長 教授 杉本光司 |
| | ②子どもの安全を守るPTA活動 都留市立谷村第二小学校 PTA会長 戸澤 敦史 | |

南都留地域教育フォーラム第2分科会（ネットワーク作りと活用）に参加して

■ 鳥原正敏

平成25年度10月31日（木）に、富士吉田市立下吉田第二小学校で行なわれた第16回山梨県南都留地域教育フォーラムに、私と本学特任准教授館山拓人先生、初等教育学科図工・美術教室学生二名と参加しました。

本年度のテーマは「子どもたちの教育は地域全体で担う」で、体育館で行なわれた全体会では来賓挨拶、助言者の紹介、基調提案に続いて県立吉田高校筆曲部の演奏が行なわれました。その後、各会場に分かれて七つの分科会が開催され、我々は第二分科会に参加しました。

第二分科会のテーマは「ネットワーク作りと活用」で、館山先生と学生は提案者として、私は助言者として参加しました。ここで行なわれた提案は二件、一つ目はたからばこ作戦研究チームを代表して館山先生が「デジタルデータベースを使った図画工作のあらたな試み〜旭小学校における『たからばこ作戦』の実践を通して〜」を発表、このなかで研究活動の様子について図工・美術教室の佐藤優海さんと早坂駿吾さんがそれぞれスピーチを行ないました。続いて二つ目の発表、富士河口湖町立船津小学校教諭山下裕先生による『「思いを届けよう!」〜被災地の小学校へのメッセージ〜』が行なわれました。

会場には世話人や記録係、司会者のほかに提案者、

助言者を含め30名ほどの参加者があり、発表後の質疑応答や話し合いでは参加者それぞれの視点から、多くの鋭い指摘や新たな発想に繋がるご発言があり、熱気のある有意義な分科会となりました。

会のまとめでは、二つの発表と会場からの発言を受けて、子どもたちや地域が他者や他の地域と繋がっていくことの可能性を確認するとともに、プライバシーや個人情報の取り扱い、著作に関わる課題について確認が行なわれました。また画像がもつ、コミュニケーションツールとしての可能性とともに、そこに起こり得る新たな問題についても話題が広がりました。

特にICT (Information and Communication Technology) の発達した現代社会では、画像や映像には言語の違いが妨げとならないコミュニケーションツールとして大きな可能性があります。しかし宗教や文化の違いから、思わぬ誤解やトラブルも発生しかねません。こういった可能性と課題をどのように捉え解決を目指すべきか、我々大人が子どもたちと共に考えなければならぬ問題であると思います。

急速なグローバル化とICT化の進む昨今、これらは教育の現場においても大きな課題になり得るだけに、参加者の皆さんも真剣にお考えのようでした。

一方、我々図工・美術教室にとっても、これまで行なってきた活動について多くの地域の方々と直接意見交換ができたことは大きな収穫でした。なによりも地域の教育に関わる方々と直接的なつながりを持つたことをとても嬉しく、心強く感じました。

ここで我々が得たこと、学んだことの一部として参加者である学生と館山先生のコ멘トを紹介します。



平成25年度南都留地域

| 分科会 | 部会テーマ | 助言者 |
|--|---|------------------------------|
| 第1分科会 幼稚園・保育園(所)・小学校部会 —滑らかな接続のために— | ①保・小・中・教育委員会・保健師との連携で子供の育ちを見守る 道志村立道志保育所 主任保育士 長田 蘭子 | 都留文科大学 初等教育学科 准教授 筒井潤子 |
| | ②養護教諭が関わる保育園・地域との連携〜小学校入学後の学校生活を円滑に行うために〜 山中村立山中小学校 養護教諭 小川 恵 | |
| 第2分科会 小学校・中学校部会 —ネットワーク作りと活用— | ①デジタルデータベースを使った図画工作のあらたな試み 〜旭小学校における「たからばこ作戦」の実践を通して〜 都留文科大学 初等教育学科 准教授 館山 拓人 " 図工・美術教室ゼミ生 | 都留文科大学 初等教育学科 教授 鳥原正敏 |
| | ②思いを届けよう 〜被災地へのメッセージ〜 富士河口湖町立船津小学校 教諭 児童会主任 下山 裕 | |
| 第3分科会 中学校・高校部会 —地域が持っている力を生かして— | ①創作劇「巖道峠(がんどうとうげ)」を通して地域をみつめる 道志村立道志中学校 校長 梶原 正史 " 教諭 堀内 仁嗣 | 都留文科大学 初等教育学科 教授 西本勝美 |
| | ②地域と共に成長する部活動の実践 〜桂高校人間成長部(放送部)〜 県立桂高等学校 放送部顧問 島袋 あゆみ " 放送部 3年 佐藤 亜美 " 放送部 3年 棚本 真奈 | |
| | ③地域産業での活躍を目指して 〜地域と連携した工業教育〜 県立谷村工業高等学校 教諭 金井 大明 | |
| 第4分科会 小・中・高児童生徒部会 —子どもの思いをつなぐ— | ①忍野中学生の思いをつなぐ 忍野村立忍野中学校 教頭 梶原 勝由 | 都留文科大学 初等教育学科 教授 鶴田清司 |
| | ②忍野中学生の思いをつなぐ 〜キャリア教育の一環としての職業講話〜 " 初等教育学科 准教授 梶原 勝由 | |

■佐藤優海(図工・美術教室立体ゼミ3年)

教育フォーラムでの発表という貴重な経験をさせていただき、取り組みを他者と共有する重要性を実感しました。印象的であったのは、発表したあとの質疑応答において予想もしていなかった指摘や提案が多くあったことです。仲間内で試行錯誤を経て発展することは多くありますが、新しい視点も不可欠なのだと思います。「たからばこ作戦」が目指すところも、まさにこの「他者との交流による発展」です。教育フォーラムでの発表を経て、取り組みの方向性を見出すことができたほか、この「たからばこ作戦」がもつ意義を改めて確認することができました。

■早坂駿吾(図工・美術教室立体ゼミ4年)

今回は、図工・美術専攻の卒業生である森先輩の活動記録を代読するというかたちで本フォーラムに参加させて頂きました。また自身が行なっている宝保育所造形教室の活動についても触れながら、自分の学びについて発表することができました。発表の準備に携わるなかで、先生方が準備をしている姿を見ながら多くのことを学びました。また、発表の一部を自分に任されたことへの責任感や緊張感は、今後教師として多様な活動をしていく際にいかされる、大変貴重な経験になったと思います。

■館山拓人(初等教育学科特任准教授)

本フォーラムでは、「たからばこ作戦」における作

品撮影の実践をもとに、学生が子どもたちの作品の評価に関わる試みについて提案しました。この実践では、作品撮影をするともに、子どもたちに向けた評価カード(メッセージカード)を送り、また子どもたちからは「メッセージをくれた学生に会ってみたい」といった感謝の言葉が寄せられるなど、メッセージカードを介した双方の言葉のコミュニケーションが図れました。本発表をふり返ると、この実践では子どもと学生の間を取り持つのは「作品」で直接のコミュニケーションはありませんでした。作品が媒体となったコミュニケーションの在り方、つまり図工・美術のもつ特性を活かし子どもたちの作品を通して「励まし(評価)」ができたのではないかと考えています。今後は学生自らも制作に携わっている経験を活かし、将来は小学校教員として図画工作教育の理解者として教育現場で活躍出来るよう、我々は支援していくことが大切だと考えています。



フォーラムに参加したことにより、我々教員だけではなく学生もさまざまな経験や刺激を受けて、大きく成長したと感じています。

発表に際して、前日に学生を含め我々全員でリハールを行ないました。ここでは資料の確認とともに、自分の意見が短時間に伝わるようまとめられているか、話し方や言葉遣いについてはどうかなど、お互いに確認しあいました。当日学生が、教室とは違った雰囲気の方科会の会場で、若干緊張した面持ちながらもリハール以上に堂々とスピーチを行っていた様子がとても印象に残りました。

今回は限られた学生のみでの参加となりましたが、機

会があれば多くの学生とともに参加したいと考えています。また、参加した学生を通して我々が得た経験や刺激が、図工・美術教室全体に広がり、学生の意識向上に繋がっていくことを期待しています。

最後に文末ではありませんが、参加に際してご高配を賜りました南都留地域教育推進連絡協議会、富士・東部教育事務所をはじめ関係各所の皆様に、心より感謝申し上げます。

(とりはら まさとし・本学初等教育学科教員)

谷村第二小学校体験学習会に おける「陶芸講座」を振り返って

■ 館山拓人

「最初は不器用な私でもできるのかな?」と思いましたが、予想以上に上手にできてうれしかったです。楽しい思い出がまた一つふえてよかったですと思います。」これは、陶芸講座に参加した小学4年生から寄せられた感想のひとつです。

2013年10月19日(土)、谷村第二小学校において体験学習会「陶芸講座」に参加・実施いたしました。この体験学習会は、親子で活動してふれあいを深めることを目的に、本講座の他に地域の方による「うどん作り」「しめ縄作り」等、あわせて8講座で構成されています。今年度より、小学校からの依頼で本講座の講師として参加させていただき、当日は私の他に、学生スタッフとして図工・美術教室4年生の成田萌さん、新見文菜さん、早坂駿吾君、3年生の栗田彬世さんの合計5名で親子22名の指導にあたりました。

今回は、低学年の子どもたちにも比較的簡単にできるタタラ成形によるカップ制作にしました。タタラ成形とは板づくりともいい、板状にスライスした粘土を空き缶に巻き付け筒状にし、底と取っ手をつけてカップに仕上げます。制作時間は実質50分程度と大変短いですが、「実際に使うとしたらどんなデザインが良いだろう?」「紅茶を飲むときの専用カップにしよう!」など、それぞれ思いを巡らせながら楽しく制作していました。また、難しいところは学生スタッフがサポー

トしたり、親子で協力しあったりしながら無事に制作を終えることができました。後日、図工・美術教室で施釉・焼成し、現在はそれぞれのご家庭で食卓を飾っていると思います。

この度は、学校活動の一環に参加させていただきましたが、教育実習やSAT(学生アシスタントティーチャー)で関わった子どもたちと改めて交流が持てたことは、学生にとって大変有意義でした。参加学生の一人は、「楽しそうに制作している子どもたちの姿が見られたのと同時に、親子双方が教え合っているのを見間見ることができ、親子の活動はとても良いと感じた。」と感想を寄せてくれました。

陶芸は土、水、火といった自然の要素で成り立っています。それに作品の良し悪しにかかわらず、土と遊び、土とのやりとりのなかで想像力を育むことができます。その特徴です。こういった地域との交流のなかで、身近な陶器が自然の要素で成り立っていることを理解することは、子どもの多感な時期において非常に大切なことだと考えます。

(たてやま たくと・本学初等教育学科)

図工・美術教室 特任准教授



制作のデモンストレーション



子どもの制作の様子

映画『100,000年後の安全』を鑑賞して

■牛田弘長

考えさせられたこと

都留文科大学二号館において開催された『100,000年後の安全』の上映会に参加しました。この作品は、誰にも保障できない十万年後の安全。放射性廃棄物の埋蔵をめぐる未来の地球の安全を問いかける話題のドキュメンタリー」ということで、入場は無料でした。

映画が始まる前に社会学科教授平林祐子先生による解説があり、何故、フィンランドが原発の放射性廃棄物最終処分場を建設しているか、また今から十万年前の世界はどうであったのか考えてみると、中期旧石器時代のネアンデルタール人類による文明はまだスタートしていないとのことで、いかに十万年というのが途方もなく長い年月であるかが判る、そのようなお話がありました。この映画は福島原発の前の2010年にデンマークで製作されたものだそうです。

映画ではフィンランドのオルキオに建設が始められた原子力発電所の核燃料廃棄物の最終処分施設「オンカロ」を映していましたが、この「オンカロ」は、フィンランド語で「隠れた場所」という意味だそうです。

この場所に地下五百メートルの深い穴を掘って、そこに高レベル放射性廃棄物を埋蔵し、廃棄物が満杯になる約百年後には入り口を完全封鎖して、誰にも発見されずに、絶対悪用されないために、忘れさられるまでそこに保管するのです。核廃棄物が最終的に安全な

状態になるには少なくとも十万年が必要です。それまでの間、いかに安全にそれを保管しておくかなどについてさまざまな話し合いが行なわれましたが、環境への汚染が発生する可能性が低い永久地層処分とすることになったということです。しかし、そこで一番問題になったのは、自然環境そのものではなく、未来の人間環境についての問題でした。私たち人類は百年先の未来でさえ想像することは難しいのに、それに、文明は、いつ滅びるかも判らないのに、完全に無害となる十万年後の未来まで地下深く永遠に葬り去る、という内容でした。

映画が終わって、参加者は皆一様に「今ある廃棄物を何とかしなければならぬこと、また、それをどうしたらよいか」という大変大きな問題を投げかけられたので、会場内はしばらくの間、沈黙の状態が続いていました。

この映画では、色々な人たちの意見を取り上げ、問題提起しているのに結論は押し付けていないので、見ていて自分たちが自分なりに受け止めることができました。

勿論この映画は原子力発電所を批判している内容ではなく、原子力発電に賛成か反対かは問題としていませんでした。

私たちは今まで原子力を利用して、その恩恵を受けていますが、国内の使用済核燃料の最終処分方法が決

まっていないことへの不安と疑問が残りました。最後にこの映画は、今の私たちが考えられる限度ぎりぎりの対処法として冷静に伝えるドキュメンタリー映画であると思いました。

(うしだ ひろなが・都留市民)



平林祐子先生による解説



文大名画座「100,000年後の安全」上映会

富士河口湖町議会との「議会基本条例」づくりに参加して ——公立大学の地域貢献、そして憲法92条と憲法23条の出会い——

■進藤 兵

富士河口湖町議会の「議会基本条例」は、さる2013年9月議会で全会一致で成立しました（全文は、<http://www.town.fujikawaguchiko.lg.jp/> に掲載）。社会学科の横田力教授と私は、この条例案づくりに参加する好機を得ましたので、その経緯の一端を書きたいと思います。以下は私の個人の意見とご理解ください。

1990年代からの地方分権改革は、国から都道府県へ、さらに市町村へ事務事業・権限を移管する「団体自治の充実」が主眼でしたが、2000年代に入ってから、自治体とその事務事業・権限をいかに活用するかという「住民自治の充実」が課題となりました。それは、市町村長優位の「地方行政」から、地方議会を長とともに「車の両輪」と位置づけ、主権者である住民の参加を活発にする「地方府政」への転換の課題でもありました。こうした経緯から、全国各地で地方議会改革が進められています。その中軸が「議会基本条例」の制定です（詳しくは、<http://www.gikai-kakaku.net/> 参照）。

富士河口湖町議会は2011年6月に議会改革推進特別委員会を発足させ、審議公開や議員どうしの議論の活発化を図ってきました。最も近隣の社会科学系大学であることや、

議員さんの中に文大の卒業生がいるという縁もあって、本学は12年8月に「富士河口湖町と都留文科大学の議会改革に関する協定」を調印しました。憲法学専攻の横田力教授と、地方政治を研究する私などが講師となる形で4回ほどの研究会をもち、13年春から議員の方々と私たちとの間で具体的な条例案の検討を行ない、8月に成案を得たという次第です。

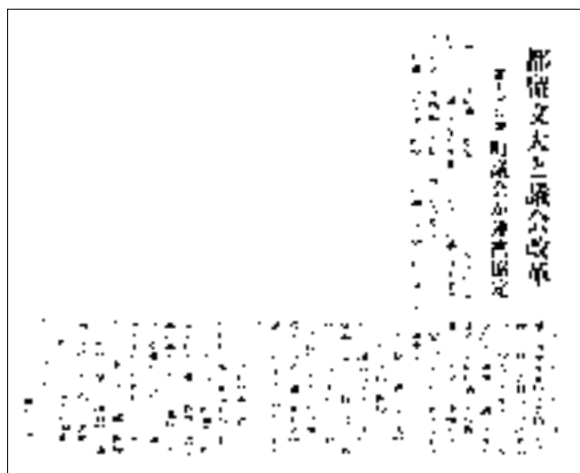
検討作業は、憲法の原則や国の法律、他の市町村の条例、町の他の条例・規則を確かめながら、「富士河口湖らしい」案を作るべく、一条一条、丁寧に検討し、未解決の点は「宿題」として双方が持ち帰り、次の回に再度検討するという形で進み、5か月に及ぶ熱心なものでした。私たちが授業を終えてから会議をもち、数時間に及ぶこともありました。

私にとつては、第一に、これまでの研究が地方自治の現場で試される真剣勝負の機会でしたので、つらくもありましたが、学ぶこともたくさんありました。第二に、公立大学である本学がこうした形で地域に貢献できたことをうれしく思いました。第三に、地方自治の充実のために大学と学問が貢献するという形で、憲法92条（地方自治）と憲法23条（学問の自由）が出会い、幸せな関係を結べたと考えています。今後、この条例が活用されることを期待するとともに、私もお手伝いをしていきたいと思っています。

（しんどう ひょう・本学社会学科教員）



条例案の検討会の様子 本学図書館にて



2012年8月2日、山梨日日新聞記事

イギリスの文化、歴史を学んで

■佐野兼央

都留文科大学で9月～12月まで10回にわたり開催された英語講座に参加しました。

ヘイミツシュ・ギリズ准教授による授業は毎回楽しく、和気あいあいとした空気で学ぶことができました。イギリスの家庭の様子から国のあり方の違いまで、幅広く英国の文化を学びました。

なぜ高校生の私がこの講座に応募したのか、それは英語も好きということもあったのですが、日本という小さな国の考え方にどまらなくて物事を見るのでなく、外国の文化に触れることでもっと大きく広い感性が育まれるのではと思っただけです。高校生世代が国の方による国民の考え方の違いや、また同質なものなどについて正しく理解を深めることは必要不可欠であると考えます。先入観やネットの断片的な情報で他の国を知ったつもりでいることへの恐れも日常的にあります。

授業のレベルは、なかなか高いです(笑)。辞書を引くつばなし。それでも難しい表現や単語の意味、使い道などをしっかりと丁寧に説明をしていただいたので、ものすごく勉強になりました。主に他の生徒(といってもかなり年上)とグループを作って授業を行なったのですが、周りは英語が上手な人たちばかりで助けられることばかりでした。ヘイミツ

シュ先生のゼミの生徒も多く参加しており、授業が毎回盛り上がりつつ緊張もせず楽しく受けられました。

とくに私が衝撃を受けた授業は第5回の「イギリスの教育制度について学ぶ」と第8回「イギリスの階級制度について学ぶ」でした。

教育制度は日本とは全く違います。小学校の成績までもが大学進学に影響する何とも恐ろしい制度があったり、日本の広く浅くのスタイルより、狭く深くのスタイルを重く見ているようで、高校からすでに専門的な学習カリキュラムを組んでいるそうです。とても興味があります。

階級制度ということば自体に私たちには馴染みがなく、驚きの連続でした。収入の違いで行くスーパールのランクが違ったり、生まれた家の違いで人生が決まるという話に納得できないことが多かったのですが、それが文化の「違い」を受け止めることなのでしょう。日本でも収入格差が広がる状況が生まれつつあると聞きますが、将来の日本を暗示するのか、それとも廃れるべき英国独自の制度なのか。

文化を知ること。私はそれが国と国との差別や偏見をなくす初歩的かつ不可欠なものだ

と考えます。それはとても力を持ちながらも誰も見落とされているものだ。グローバル社会において互いの国を知る、文化の「違い」を認める、その大切さを今回のヘイミツシュ先生の授業を通じて学びました。ありがとうございました。

(さの) けんおう・都留高等学校1年



イギリスの文化・比較文化の見地から

■小野武彦

全10回の英語文化の講座に吉田、大月など近隣の市町村から30名の受講者が集まりました。高校生から80歳代の方まで、今更ながらに皆さんの英語熱の高さに驚かされました。グループ編成で興味深かったことは通常教室の所定の位置に陣取り談笑し講義を受けるのが私たちの一般的な行動パターンだと思えますが、しかし講師のヘイミッシュ先生は毎回必ずグループの構成メンバーを変更します。確かにその方が色々な方々と会話が出来て交流も深まります。

私たちは外国人と言って、西欧人一つに括ってしまいますが、イギリス人・ブリティッシュの人々は我が国と同じ島国のため複雑な性格を持っているそうです。日本人はよく本音と建て前を使い分けますが、イギリス人も同じように使い分けるそうです。ですから言葉の裏を読み取る必要があると教えてくれました。アメリカ人のように初対面からフランクにはなれないので、一般的に天候の話から入るのが無難だと話してくれました。

英語の特徴の一つにウイット・ユーモアがあります。ある意味では西欧人の方が人間関係がきついのでしょうか。ですから気の利いたウイットは会話を和ませ上品な教養を感じさせます。先生も毎回色々と笑わせてくれました。

た。初日は若い女性を連れてきて、これは僕の彼女だと紹介してくれましたが、実際には先生の姪御さんでした。

東京オリンピック招致の際「おもてなし」という言葉が脚光を浴びましたが、毎回、先生と職員の間で皆さんが紅茶とビスケットで、もてなしてくれました。

正直に申し上げて、今回の講座は結構レベルの高いものでした。私たちは英語と言うとアメリカ英語を連想しますが、何気無く使う英語という言葉は米語を指しており、情報源は米国が中心です。ですからブリティッシュ英語の先生の言葉を聞き取るのはかなり骨がおられました。

つまるところ言葉と文化は表裏一体のものであり、切り離すことは出来ないと思います。まあ難しく考えずに楽しみましょう。クリスマス・パーティーも次回に取っておきます。それまでに英語も上達するでしょう。

ヘイミッシュ先生、職員の皆様有難うございました。

(おの たけひこ・都留市民)

【前半】

| | | |
|-----|-----------|------------------------------|
| 第1回 | 9月30日(月) | イギリスの国民性について学びましょう。 |
| 第2回 | 10月7日(月) | イギリスの伝統的な田舎生活について学びましょう。 |
| 第3回 | 10月21日(月) | イギリスの都会生活(特にロンドン)について学びましょう。 |
| 第4回 | 10月28日(月) | イギリスの伝統的な家や家族生活について学びましょう。 |
| 第5回 | 11月11日(月) | イギリスの教育制度や立場や特徴について学びましょう。 |

【後半】

| | | |
|------|-----------|-------------------------------|
| 第6回 | 11月18日(月) | イギリスの文学について学びましょう。 |
| 第7回 | 11月25日(月) | イギリスのユーモアについて学びましょう。 |
| 第8回 | 12月2日(月) | イギリスの階級制度について学びましょう。 |
| 第9回 | 12月9日(月) | イギリスの王室について学びましょう。 |
| 第10回 | 12月16日(月) | イギリスの伝統的なクリスマスやお正月について学びましょう。 |

平成25年度 市民公開講座

●テーマ：
British Culture (イギリスの文化)

●講師：
本学文学部英文学科
Hamish Gillies (ヘイミッシュギリス) 准教授



つる子どもまつり — はじまり・いま・みらい — 展を振り返って

一昨年の秋に谷村のまち探検隊などのイベントを共催したことをきっかけに、昨年の夏に「ミュージアム都留」エントランスホールにて「つる子どもまつり実行委員会」による展示を行なうことになりました。毎年5月の第3日曜日に行なう「つる子どもまつり」の当日の様子や44年の歴史、関わっている団体や運営方法などを展示で振り返りました。

(森屋雅幸・都留市教育委員会学びのまちづくり課文化振興担当)

■花山泰裕

昨年の7月27日から8月18日までの3週間、「ミュージアム都留」のエントランスホールは「つる子どもまつり」色にしっかり染まっていたと思います。今回は、この展示企画に込めた想いに触れながら感じたことを綴りたいと思います。

◇

学生が…というイメージ

私たち「つる子どもまつり実行委員会」は〈子どもたちに地域の中で健やかな成長を遂げてほしい〉という想いを掲げて話し合い、市民団体として活動をしています。しかし、「つる子どもまつり」について〈学生が子どものために毎年行なうおまつり〉という印象を抱いている市民が多いと感じるのが現状です。

そこで、この展示企画を通じて「つる子どもまつり」がどのように創り上げられているのかを伝えたいと考えました。

◇

言葉を介して伝える…という機会

今回の展示企画では、「つる子どもまつり」1日の様子が伝わるように当日使われていたものや、どのような団体が実行委員会に所属し、企画を行なっているかが伝わるように団体の紹介を展示しました。また、当日という短い期間のことだけでなく、何十年と続く伝統を少しでも伝えられるようにと、当初の資料や、年ごとにどのように話し合われていたのかを記す報告集の展示を行いました。

このようにすることで、子どもの頃にあそびに来てくれた市民や今年あそびに来てくれた子どもや親御さんに、「つる子どもまつり」がどのような企画か言葉を介して伝えられたのではないかと思います。

◇

「ミュージアム都留」…という可能性

今回、展示企画をしてみて大きく分けて2つのことを強く感じました。

1つ目は展示していた私たち自身も準備をする過程で「つる子どもまつり」というものを振り返ることができたことです。人と人のつながりを大切にしている私たちは、この想いを文字や写真、創造物を用いて伝えるため、

試行錯誤しながらどのようなことを伝えたいのかを改めて考えられたと思います。

2つ目は展示期間が終わり、片づけをしてみte感じたことです。それは「ミュージアム都留」のエントランスホールは思っていた以上に広いということです。私たちも今回の展示企画を成功させるためにエントランスホールをフル活用しました。

毎年、城下町つるの雛祭り展や和服リフォーム展などエントランスホールを用いた展示企画が行なわれています。私たちもこれから「つる子どもまつり」の展示企画ができればと思います。そして、私たち市民がこの「ミュージアム都留」のエントランスホールを文化伝承の場所として用いることによつて、もつともっと良い博物館になっていければと願っています。

(はなやま やすひろ・初等教育学科3年・

つる子どもまつり実行委員会事務局)



企画展「写真が伝える都留の思い出—未来へ贈る地域の記憶—」の準備から考えること

■ 森屋雅幸

本誌にて継続してご報告させていただいておられますように、「都留文科大地域交流研究センター」と「ミュージアム都留」では、一昨年より市内の写真とそれにまつわる記憶を収集し、その保存を進めております。皆様のご協力のおかげで、1月末現在までに818点の写真を収集することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、本事業の成果を市民の皆様にお伝えすべく、3月22日から5月6日にかけて「ミュージアム都留」にて企画展「写真が伝える都留の思い出—未来へ贈る地域の記憶—」を開催いたします。ここでは、本企画展開催に向け、準備を進めていくなかで発見したことや考えたことを中心にお話したいと思います。

本企画展では、収集した写真の撮影場所を探し、その場所と同じアングルで撮影した現在の写真の展示を考えています。この準備のため、場所が特定できる写真を50枚ほど選定し、現地で撮影を進めていきました。撮影場所を特定するため写真を眺めていくと、さまざまな撮影者によって同じ地点で複数写真が撮影されている場所が分かってきました。こうした場所は当時の人々の関心の地点にあると考えられ、人々にとって大切に思われてい

た場所であることを示しているといえます。

例えば、上谷から法能に抜ける鍛冶屋坂トンネル脇の旧道にある鍛冶屋坂導水橋（通称ピーヤ）も複数写真が撮影されています。今はこの旧道を使う人もなく、人気のない場所になっていますが、当時の人々にとって馴染みの場所であったことが窺えます。また、ピーヤに限らず、橋の写真はさまざまな撮影者によって撮影されていることに気が付きました。橋は現代でも人目を引く建設物であると思いますが、それ以上に昔は地域住民にもっと身近で、地元のシンボルとして認識されていたのではないかと感じました。

こうした写真は人と場所のかかわりの変化も映し出しているように感じます。とくに山の上から写した鳥瞰写真はこうした状況を如実に示しているように思います。実際に現地へ赴き同じアングルで撮影しようとする、全ての地点において木々で下界が見渡せない状況でした。これは単に木々が写真撮影時から成長したというに限らず、人が山へ入らず、木々に手を加えなくなったこともひとつの要因に考えられます。

このような場所の写真について撮影者や関係者から聞き取りをすると、そこにはさまざまな思い出（記憶）が残されていることが分かりました。写真に映る場所は、いわば「記憶の場」と呼ぶことができるでしょう。昔撮影された写真は現代において見落としてしま

いがちな場所に気が付かせてくれると準備を通して実感しました。この企画展を埋もれた地域の「記憶の場」を再発見する機会にできるよう、引き続き準備に取り組んでいきたいと思えます。

（もりや まさゆき・都留市教育委員会

学びのまちづくり課 文化振興担当



鍛冶屋坂導水橋（通称ピーヤ）



川棚と谷村を結ぶ城南橋



2012年12月3日、自然科学棟の側溝で撮影されたニホンリス

都留文科大学は二つの山すそに挟まれる緩やかな斜面に立地していますが、その山すそからキャンパスにリスを呼び込もうという「キャンパスにリスを呼ぶ会」(略称「リスを呼ぶ会」)の活動が進んでいます(本誌24号10頁に関連記事があります)。会員は、関心をもつ学生、院生、教員、職員より成っていますが、本年2月の会員数は66名で、会員にはメール・ニュースが配信されます。また美術教室の館山拓人先生によるクルミの木を使った素敵な「会員証」が届けられています。たいへん好評です。

クルミの木をキャンパスに植樹する計画(趣意書)

2010年6月17日

地域交流研究センター・フィールド・ミュージアム部門

代表：鳥原正敏(「リスをキャンパスに呼ぶ会」会長)

I. 計画の基本イメージ

キャンパスにクルミの木の苗を植え、やがてその実をリスが食べに来るようにし、キャンパスの中でリスとの出会いを楽しめるようにしていく。

クルミの木の植樹場所は、自然科学棟の裏の斜面、美術棟の裏の斜面、2号館南部のグランド斜面と2号館横のグランドフェンスに沿う並木の箇所、1号館の裏庭(スロープ通路の近辺)、計10本とする。

「リスをキャンパスに呼ぶ会」というものをつくり、学生、教員、職員、市民など、広く関心をもって見守ることとする。

II. この活動の意味について

この活動の意味については、経験しながら様々に見出していくことになるでしょうが、取組みを始めるに際して思い描いていることは、下記のようなことです。

1. 都留文科大学では、「ムリネモ」(ムササビ、リス、ネズミ、モグラ)を様々な位相(樹上、木

と大地、地表、地下など)に暮らす哺乳類のシンボルとして観察し、探究する伝統をもってきております。ムササビはすでにキャンパスに巣をもっています。本計画は、リスとのエンカウンタースペース(出会いの場)を、キャンパスの中に創ろうとする試みです。

2. 本学のキャンパスは、自然そのものを背景にもっていますので、生き生きとしたリスの生態など、学術的意味をもつ観察が可能になると思われ

3. クルミの木の苗については、その種(実)の採取、播種の記録も明確で、クルミの木を中心とする植生の観察・研究も可能性をもちます。

4. 今日、里山を中心に、野生生物との「共生」ということが大きなテーマになっていますが、本計画は、そのことを実践的に考える一つのヒントになるでしょう。また、この「リス」を呼ぶというやさやかな実践は、広く自然(動物・植物など)に心を向ける契機にもなっていくでしょう。

5. クルミは、植樹してから5年くらいで実をつけ始めるとされますが、その頃には在学している学生たちは卒業しているわけですし、教員・職員の一定数も定年退職していることでしょう。そのように、この取組みでは、直接に実りに出会えないような営みをも楽しんでいくという、人間的な経験を共有していくこととなります。

リスを目撃しました

「リスを呼ぶ会」の会員になられた松土清先生は、すでにキャンパスでリスを目撃されていました。その経験を「リスを呼ぶ会」のメール・ニュース4号(2013年11月29日)に書いて頂きました。

■松土 清

「リスを呼ぶ会」にリスでもない私を呼んでいただきありがとうございます。

1. 何月何日ころのことか。時間は何時ころか？
 日時は、金曜日の4限の空き時間だと思うので3時ごろかと思いますが、もしかしたら2限前の10時ごろであった可能性もあります。また、芝生にモグラの穴が出る前でしたから、11月8日か15日のどちらかなのですが、どちらかは定かではありません。

2. 場所はどこで、どのように動いていたか？

場所は、生協の南側の松と杉の混合木の根元を東から西に向かって、数メートル動いては立ち止まり、また数メートル動いてはを繰り返して、大きい樺の方に向かいましたが、南北に走る躑躅の植え込みの根元で見失いました。

3. 形の特徴はどうだったか？

形の特徴は、都留市の北側の御坂山系に多く生息するリスと全く同じ種類です。鎌倉鶴岡八幡宮のリスによく似ていますが、あちらは種類が違うのか摂食状況がよいのか太って見えます。

4. そのときの松土さんの感想？

リスには縁がありまして、まず私の家族が戦時に奥山深い所に疎開しましたので、子供のころは庭先までリスやイタチなどがしょっちゅう来ていましたので親しみ深い動物でした。

1972年にロッキー山脈の麓のポールドーという町でホームレスみたいな学生生活をしていました。そんな時にキャンパスを走り回るリスや近くの川でダムをつくるビーバーの姿を見るととても心が癒されました。私がリスをsquirrelと言った時に、あれはchipmunkだと友人に何回も言い直された思い出があります。

都留文科大では、4号館の東端から本部棟の方角を見るのが私の一番好きなアングルなのでよくベンチに座りに出かけます。そんな



自然科学棟と美術棟の間にある林に設置されたリスの橋と餌台

な時にリスが現れたわけですから、この舞台にこの役者ありだったわけです。嬉しかったですね、実に。これからはカメラを携行します。

(まつど きよし・本学英文学科特任教授)



手作りによる「キャンパスにリスを呼ぶ会」の会員証。人気が高い逸品。入会の問い合わせは、地域交流研究センター事務局まで



キャンパスの「ムササビの森」の林縁にリスの餌台を設置した「キャンパスにリスを呼ぶ会」のメンバー



●●編集後記●●

○巻頭文は、本誌の読者であり、和歌山大学生涯学習教育研究センター長なども歴任された和歌山大学学長である山本健慈氏にお願いしました。山本氏は、その豊富な実践経験と学識に基づいて、地域社会と大学との共同（交流）について、〈大学の学問の自由〉とともに〈住民の学習の自由〉の保障が基本条件になると述べておられます。この基本条件を充実させていくということは、私たちの地域交流の、変わるのではない本質的な観点となるでしょう。

○特集1は動き始めた「都留市まちづくり交流センター」に光をあてました。「都留文科大学地域交流研究センター」とは独立に、つまり地域社会にまちづくり交流の拠点が設定され、ゆたかな活動が期待されているということです。そこに「都留文科大学地域交流研究センター」はサテライトを置き、この新たな取り組みに参加していますが、全体の組織・運営・内容などは模索の段階と思われる。山本氏の巻頭文を含め、まちづくり交流の知見を広くし、相互の協力・共同の関係を丁寧に拓いていきたいと思います。2月14日からの降雪災害では、この「都留市まちづくり交流センター」が帰宅困難者の避難所となり、そこを介して助け合いも生まれたようです。(15頁)

○前号の近藤幹雄氏（本学名誉教授）による巻頭文を読まれた複数の方々から、「都留文科大学事件」(1965年)が在ったことを初めて知りましたという感想が寄せられました。遠山茂樹・森川金寿編『都留文科大学事件の記録』(1969年)に拠りますと、この「事件」は当時広く注目されていたということで、たとえば教育行政学の泰斗である宗像誠也氏（東京大学教授）は日本学術会議の学問・思想の自由委員会委員長として、都留文科大学学長に、「学問の自由と大学の自治」の観点からの質問の書簡を送っています（186～189頁）。大学の出版事業

として、本書が復刻されることを願います。

○NHKカルチャーラジオにて、今泉吉春氏（都留文科大学地域交流研究センター初代センター長、本学名誉教授）による『シートン動物記』に見る人と自然』が放送されました（2013年7月～9月）。その放送に刺激を得て、氏の著作『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』（福音館書店、2002年）を改めて開いたのですが、今泉氏は同書で、エデュケーションの訳の「教育」は、「教える」というより「ひきだす」ということに基本があると述べています（315頁）。

○大田堯氏（都留文科大学元学長、本学名誉教授）の『大田堯自撰集成』（全4巻、藤原書店）の刊行が始まりました。既刊の第1巻、2巻で、大田氏は今日の私たちの教育にかかわる基本問題について原理的に親しみやすく語っていますが、educationの訳として「教育」をあてたのは「誤訳」だったというべき、と述べています（第1巻300頁）。近刊予定の第3巻には、本誌16号、17号に掲載された大田氏のインタビュー記事「見沼フィールド・ミュージアムを呼びかける」が収録されるようです。

○次号は、「地域福祉と都留文科大学」を特集する予定です。【訂正】前号の萩原好一氏の「ジャーナリスト山本美香さんの取材を通して」（39頁1段8行目）の文章で校正ミスがありました。訂正しお詫びいたします。

<誤>「…知り得た情報を世界に伝えること。平和を築く力になると信じていたこと。」

<正>「…知り得た情報を世界に伝えることが平和を築く力になると信じていたこと。」

（畑潤・編集長）

地域交流センター通信 第25号：2014年3月18日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長・畑潤 杉本光司 佐藤隆 坂田有紀子 鳥原正教 品田笑子 北垣憲仁 久保田浩 本田祐士 小林幸恵）

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 tel.0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁